

## LESSON NOTES

# Advanced Audio Blog S4 #1

## Top 10 Japanese Authors: Sōseki Natsume

---

## CONTENTS

- 2 Kanji
- 3 Kana
- 4 Romanization
- 5 English
- 7 Vocabulary
- 7 Sample Sentences
- 8 Grammar

# 1

# KANJI

1. 夏目漱石
2. 日本で最も有名な小説家は？ と問われれば、多くの人が「夏目漱石」と答えるでしょう。1984年から2003年までに発行された千円札の肖像画にも採用されたことから、名前だけでなく顔も広く日本人に知られています。
3. その漱石が初めて発表した作品が『吾輩は猫である』です。「吾輩は猫である。名前はまだない。」という書き出しで、捨て猫が主人公というユーモラスな設定。拾ってくれた中学校教師である「苦沙弥（くしゃみ）」先生（この名前もかなり面白いですね）を初め、その家族や家に入り出る先生の友人・弟子たちの言動を猫の視点で観察したように書かれています。この作品が大ヒットしたため、『吾輩ハ鼠デアル』『我輩も猫である』などたくさんのパロディが生まれました。
4. 『吾輩は猫である』だけを読むと、作者・漱石はおもしろおかしい人物だと思われそうですが、その他の作品からは「生きる意義とは何か」「人はエゴイズムから脱却できないのか」と真剣に自らの心と向き合う姿が読み取れます。
5. 43歳のときに胃潰瘍が悪化して危篤状態に陥り、生死の境をさまよってからは、病魔と闘いながら執筆を続けました。中でも『こころ』は「人は人を傷つけずに生きていけないのか」、「エゴイズムが原因で生じた罪を背負ったまま生きていく苦悩」などがテーマとなり、今でも多くの人々に読み継がれています。
6. 作品の魅力だけでなく、漱石自身の人柄を慕って何人もの文学青年たちが彼の家を訪れ、定期的に文学や社会のことを話し合う機会を持ったそうで、「木曜会」と呼ばれていました。後に紹介する芥川龍之介もこの会に参加しています。
7. 1867年2月 東京に生まれる
8. 1916年12月 享年49歳
9. 代表作 『吾輩は猫である』

CONT'D OVER

10. 『坊つちゃん』

11. 『こころ』

## KANA

1. なつめそうせき

2. にほんでもっともゆうめいなしょうせつかは？ ととわれれば、おおくのひとが「なつめそうせき」とこたえるでしょう。1984ねんから2003ねんまでにはっこうされたせんえんさつのしょうぞうがにもさいようされたことから、なまえだけでなくかおもひろくにほんじんにしられています。

3. そのそうせきがはじめてはっぴょうしたさくひんが『わがはいはねこである』です。「わがはいはねこである。なまえはまだない。」というかきだしで、すてねこがしゅじんこうというユーモラスなせってい。ひろってくれたちゅうがっこうきょうしである「くさや(くしゃみ)せんせい(このなまえもかなりおもしろいですね)をはじめ、そのかぞくやいえにでいりするせんせいのゆうじん・でしたちのげんどうをねこのしてんでかんさつしたようにかかれています。このさくひんがだいひつとしたため、『わがはいハねずみデアル』『わがはいもねこである』などたくさんのパロディがうまれましました。

4. 『わがはいはねこである』だけをよむと、さくしゃ・そうせきはおもしろおかしいじんぶつだとおもわれそうですが、そのほかのさくひんからは「いきるいぎとはなにか」「ひとはエゴイズムからだっきゃくできないのか」としんけんにみずからのこころとむきあうすがたがよみとれます。

CONT'D OVER

5. 43さいのときにいかいようがあっかしてきとくじょうたいにおちいり、せいしのさか  
いをさまよってからは、びょうまとたたかいながらしっぴつをつづけました。なかでも  
『こころ』は「ひとはひとをきずつけずにいきていけないのか」、「エゴイズムがげ  
んいんでしょうじたつみをせおったままいきていくくのう」などがテーマとなり、い  
までもおおくのひとびとによみつがれています。
  
6. さくひんのみりよくだけでなく、そうせきじしんのひとがらをしたってなんにんもの  
ぶんがくせいねんたちがかれのいえをおとすれ、ていきてきにぶんがくやしゅかいの  
ことをはなしあうきかいをもったそうで、「もくようかい」とよばれていました。あと  
にしょうかいするあくたがわりゅうのすけもこのかいにさんかしています。
  
7. 1867ねん2がつ とうきょうにうまれる
  
8. 1916ねん12がつ きょうねん49さい
  
9. だいひょうさく 『わがはいはねこである』
  
10. 『ぼっちゃん』
  
11. 『こころ』

## ROMANIZATION

1. Natsume Sōseki
  
2. Nihon de mottomo yūmei na shōsetsuka wa? to towarereba, ōku no hito ga "Natsume Sōseki" to kotaeru deshō. 1984-nen kara 2003-nen made ni hakkōsareta sen'en satsu no shōzōga ni mo saiyō sareta koto kara, namae dake de naku kao mo hiroku Nihonjin ni shirarete imasu.

CONT'D OVER

3. Sono Sōseki ga hajimete happyō shita sakuhin ga "wagahai wa neko de aru" desu. "Wagahai wa neko de aru. Namae wa mada nai." to iu kakidashi de, sute neko ga shujinkō to iu yūmorasu na settei. Hirotte kureta chūgakkō kyōshi de aru "Kushami" sensei (kono namae mo kanari omoshiroi desu ne) o hajime, sono kazoku ya ie ni deiri suru sensei no yūjin, deshitachi no gendō o neko no shiten de kansatsu shita yō ni kakarete imasu. Kono sakuhin ga daihitto shita tame, "wagahai wa nezumi de aru" "wagahai mo neko de aru" nado takusan no parodī ga umaremashita.
4. "Wagahai wa neko de aru" dake o yomu to, sakusha, Sōseki wa omoshiro okashii jinbutsu da to omoware sō desu ga, sono hoka no sakuhin kara wa "ikiru igi to wa nani ka" "hito wa egoizumu kara dakkyaku dekinai no ka" to shinken ni mizukara no kokoro to mukiau sugata ga yomitoremasu.
5. 43-sai no toki ni ikaiyō ga akka shite kitoku jōtai ni ochiiri, seishi no sakai o samayotte kara wa, byōma to tatakai nagara shippitsu o tsuzuke mashita. Naka demo "kokoro" wa "hito wa hito o kizutsukezu ni ikite ikenai no ka", "egoizumu ga gen'in de shōjita tsumi o seotta mama ikite iku kunō" nado ga tēma to nari, ima demo ōku no hitobito ni yomitsugarete imasu.
6. Sakuhin no miryoku dake de naku, Sōseki jishin no hitogara o shitatte nannin mo no bungakuseinentachi ga kare no ie o otozure, teikiteki ni bungaku ya shakai no koto o hanashiau kikai o motta sōde, "mokuyōkai" to yobarete imashita. Ato ni shōkai suru Akutagawa Ryūnosuke mo kono kai ni sankā shite imasu.
7. 1867-nen 2-gatsu Tōkyō ni umareru
8. 1916-nen 12-gatsu kyōnen 49-sai
9. daihyōsaku "wagahai wa neko de aru"
10. "Bocchan"
11. "kokoro"

## ENGLISH

CONT'D OVER

1. Sōseki Natsume
2. If asked, "Who is the most famous novelist in Japan?" surely many people would reply "Sōseki Natsume". Due to the fact that his likeness was featured on the thousand-yen note from 1984 until 2003, not only his name but also his face are familiar to many Japanese.
3. Sōseki's first published work was "I Am a Cat". The first line, "I am a cat. I don't have a name yet," establishes the humorous setup that the main character is a stray cat. Starting with the middle-school teacher, Mr. Sneeze (this is also a pretty amusing name, isn't it?), who adopts the cat, and continuing with his family and the friends and apprentices and such who come and go to and from his house, the book is written as if from the point of view of the cat as it observes all of their words and actions. Due to the book's huge success, there appeared many parodies of it, such as "I Am a Mouse" and "I Am a Cat, Too".
4. If you were only to read "I Am a Cat", the writer, Sōseki, would probably seem like an amusing person, but it is from his other works that one can sense Sōseki seriously confronting his own innermost thoughts, with questions such as "What is the meaning of life?" and "Is it impossible for human beings to cast off their egoism?"
5. Following the worsening of a gastric ulcer in his forty-third year, Sōseki fell into a critical condition. After hovering on the border between life and death, Sōseki kept writing, all the time battling with illness. During this time, he wrote "Kokoro", whose themes include whether it is possible for human beings to live without hurting others and the pain of continuing to live while bearing the guilt caused by egoism, which even now is read and beloved by many people.
6. It was not just the power of his work, but also Sōseki's personality that endeared him to the however many literary youths who visited his house; there, they apparently had the regular chance to discuss literature, society, and so on. This became known as "The Thursday Group". Ryūnosuke Akutagawa, who I will introduce later, also participated in this group.
7. FEBRUARY 1867: Born in Tokyo

CONT'D OVER

8. DECEMBER 1916: Died aged 49
9. BEST-KNOWN WORKS: "I Am a Cat", "Botchan", "Kokoro"

## VOCABULARY

Kanji	Kana	Romaji	English
肖像画	しょうぞうが	shōzōga	portrait
慕う	したう	shitau	to long for
執筆	しっぴつ	shippitsu	writing
境	さかい	sakai	border, boundary
危篤状態	きとくじょうたい	kitokujōtai	critical condition
胃潰瘍	いかいよう	ikaiyō	gastric ulcer
脱却する	だっきやくする	dakkyaku suru	to cast off, to free oneself
我輩	わがはい	wagahai	I (archaic; nuance of arrogance)
言動	げんどう	gendō	speech and behaviour
定期的に	ていきてきに	teikitekini	at regular intervals, periodically

## SAMPLE SENTENCES

<p>本人にそっくりの肖像画が飾ってある。  <i>Honnin ni sokkuri no shōzōga ga kazatte aru.</i></p> <p>There is a portrait that looks a lot like the actual person.</p>	<p>彼は、多くの後輩から慕われている。  <i>Kare wa ōku no kōhai kara shitawarete iru.</i></p> <p>He is loved by many of his juniors.</p>
--	--

<p>この小説家が執筆した作品は30にも及ぶ。 <i>Kono shōsetsuka ga shippitsu shita sakuhin wa sanjū ni mo oyobu.</i></p> <p>The number of books this novelist has authored amounts to more than thirty.</p>	<p>海と空の境が見えない。 <i>Umi to sora no sakai ga mienai.</i></p> <p>I can't see the boundary between the ocean and the sky.</p>
<p>危篤状態の母と会話した。 <i>Kitokujōtai no haha to hanashita.</i></p> <p>I spoke with my mother, who is in a critical condition.</p>	<p>ストレスから、胃潰瘍になってしまった。 <i>Sutoresu kara ikaiyō ni natte shimatta.</i></p> <p>I suffered from gastric ulcer due to stress.</p>
<p>この悪循環から脱却したい。 <i>Kono akujunkan kara dakkyaku shitai.</i></p> <p>I want to free myself from this vicious cycle.</p>	<p>現代の人は、「我輩」という言葉をほとんど使わない。 <i>Gendai no hito wa "wagahai" to iu kotoba o hotondo tsukawanai.</i></p> <p>People in modern times hardly ever use the word "wagahai".</p>
<p>彼は、首相としてふさわしい言動を取った。 <i>Kare wa shushō to shite fusawashii gendō o totta.</i></p> <p>He showed good behavior for a prime minister.</p>	<p>定期的に貯金する。 <i>Teikiteki ni chokin suru.</i></p> <p>I regularly save money .</p>

## GRAMMAR

**Natsuko:** オーディオブログ、第四シーズン、第一課、夏目漱石

**Yuichi:** 新しいシーズンが始まりましたね。

**Natsuko:** はい。このシーズンは私なつこと、

**Yuichi:** 僕、ゆういち が 担当します。皆さんよろしくお願ひします。

**Yuichi:** このオーディオブログ第四シーズンについての説明は、ボーナストラックにありますので、JapanesePod101.comのサイトに来て、是非聞いておいてください。

**Natsuko:** さて、この第一課から第10課までは、日本の有名な作家を一人ずつ紹介していくんですね。

**Yuichi:** はい。このレッスンでは皆さんに、『夏目漱石』という作家を紹介していきます。

**Natsuko:** では、聞いてみてください。

== Blog 本文 ==

Natsuko: さて、リスナーの皆さん、どうでしたか？

Yuichi: 今までのオーディオブログよりかなり難しくなりましたよね。

Natsuko: そうですね。これ実際、私自身もちゃんと勉強しないと、あの一、読んだだけでは分からないことがあるので、みなさんも大変だと思いますけれども、頑張ってください。でも、単語を調べるのもいい勉強ですからね。調べてみてください。ところで、ゆういちさんは、夏目漱石の作品は読んだことがありますか？

Yuichi: はい、ありますね。高校生の時に国語の時間で、「こころ」という作品を読みました。教科書に載っているんで、多くの日本人が読んだことがある作品だと思います。なつこさんはどうですか？

Natsuko: そうですね。私も「こころ」は高校の国語の授業でやりました。ほかにも有名な作品は「我輩は猫である」とか「坊ちゃん」とか、そういうのは読みました。

Yuichi: 多分、夏目漱石の一番有名な作品は「我輩は猫である」だともうんですが・・・。

Natsuko: うーん、そうですね。"I am a cat" というタイトルで英訳されているので、リスナーの皆さんの中にも、もしかしたら、読んだことのある人がいるかもしれません。

Yuichi: この、「我輩は猫である」というタイトルって、すごくないですか？

Natsuko: ん？ん？(笑) どういう意味でしょう？

Yuichi: だって、このタイトルから、この猫がどんな猫かわかりますよね？

Natsuko: あー。

Yuichi: 「我輩」は猫「である」・・・ですよ。

Natsuko: たしかに、なんだか、理屈っぽくて、頭がよさそうで、プライドも高そうなイメージが伝わってきますね。しかも、この猫はオスですよ。

Yuichi: はい、そうなんですよー。オス猫、つまり、男の猫ですよ。

Natsuko: なるほど。英語の "I am a cat" だけではちょっとこのイメージは伝わらないかもしれませんね。

Yuichi: そうですね。「我輩」は「私」と同じ意味ですけども、すごく偉そうですね。自分はすごいんだ、えらいんだ・・・って思っている男の人が、使いますよね。・・・ま、今使っている人はほとんどいません。

Natsuko: そうなんですよね。昔の言葉ですからね。しかも、「である」というのは、「です」といっしょなんですけど、例えばレポートとか、論文とかでよく使われるので、固く、論理的・・・まあ悪く言うと、ちょっと理屈っぽい印象は受けますよね。

Yuichi: この「我輩」と「である」というので、こういうイメージが出ていますね。もし、タイトルが、「俺は猫だ」だったら、男っぽくて、マッチョな猫かもしれません。

Natsuko: (笑) 「あたしはねこ」だったら、もしかしたら色っぽい、魅力的な雌猫、女の猫ちゃんが登場してたかもしれませんね。(笑)

Yuichi: そうですね(笑)。

Natsuko: そう考えてみると、面白いですね～。タイトル変えるだけで、いろんな小説が書けちゃいそうですよ。(笑)

Yuichi: たしかに。

Natsuko: 日本語は一人称にも色々な種類があるから、こういうニュアンスが伝わりますよね。

Yuichi: そうですね。

Natsuko: ところで、祐一さん、夏目漱石について何かご存知だそうですね。

Yuichi: はい、インターネットで調べたところによるとですね、「肩が凝る」という日本語特有の言葉がありますね? あれを作ったのは、夏目漱石だそうです。

Natsuko: え、そうなんですか? あーでも、なんか夏目漱石っていかにも肩こりしそうなイメージですよ。

Yuichi: はい、夏目漱石の「門」という作品に使われていたそうです。

Natsuko: あー。

Yuichi: ですけどですね、これが本当ではないという説もあるそうなので、ちょっと確実かどうかは分かりません。

Natsuko: なるほど。

Yuichi: でも、有名な作家がそういう言葉を作ったって言うと、かなり説得力があると思います。

Natsuko: そうですね。特に夏目漱石だから、余計に本当らしく聞こえますよね。有名な作家のそういうバックグラウンドを知っていると、作品も少し違った目で読むことが出来るかもしれませんね。それでは、このレッスンはここまで。次回をお楽しみに。 Yuichi: さようなら。